

医師の使命感を刺激する木曽の地域医療

対談者：久米田 茂喜

長野県立木曽病院・院長

聞き手：鈴木 信夫

ゐのはな同窓会広報担当常任理事



長野県立木曽病院の久米田と申します。当院は、日本で一番広い地域を唯一担っている過酷な有床病院です。医師が最も来てくれない病院でもあります。香川県と同じ面積のある木曽地域の医療を当院だけで支えています。10人ほどおられる開業医の殆どは80歳前後ですから、全ての医療を当院が担わなければなりません。

木曽郡の人口は32,000人ですから、10万人当たりの医師数は100人を割る厳しい状況の中で、一般病床259に老人保健施設を含めても300床強の当院は、急性期から慢性期に亘る全ての患者を診ています。

急性期病院としての役割を投げ出すわけには行きません。数人の専門医が責任を持って診療分担する医療を行っています。病院機能を投げ出すわけにいかないとなると、医師は学会には出席できない、病院を離れられないというストレスが掛かりますから、誰も来たがらない病院になります。しかし、この地域の医療を誰かが担わなければならないとの志で、20人の医師が常勤医として当院に残っております。

1人抜ければ雪崩式に辞める風潮が強いご時勢にあっても、お互いに支えあって頑張っています。そういう心意気の医師ですから、1人当たりの医療業務への負担が大きく、仕事量も多くこなしているのです。この10年間は黒字経営を継続しています。へき地にある病院では奇跡の病院とも評価されています。勿論、他の病院と同じように不採算部門に対する長野県からの繰入金があります。10年間、黒字経営を維持しているのは凄いことです。1人1人の医師と職員が懸命に働いた貴重な結晶です。地域医療を守る使命感と、それを支えている義務感で成り立っている病院です。

そういう背景を持つ当院は、県からの医療設備への支援を受けています。64列CT、MRI、2室ある血管撮影室、内視鏡用電子システム、県立病院では、唯一、カルテを導入しています。その医療機器類を32,000人だけに使うのはもったいないとの理由で、森林セラピー・サポートを始めたのです。

森林セラピー・サポートでは、先ず、赤沢自然休養林に来た利用者は、森林セラピー健康診断「森のお医者さん」を受診する方式で1年間頑張ってみたのですが、健康診断の結果は大丈夫ですよ、と診断するには検査機器がなければ出来ません。そこで、病院の検査機器を活用して、より詳しい診断をする「森林セラピードック」を始めました。当院で1時間から希望により半日間のフルコース健診を行います。オプションのがん検診を希望される受診者の場合は、1日コースになります。健診結果は受診者に説明し、健康に問題のない受診者には、赤沢のロードを処方します。貴方は健康に問題ないからこのコースをこれ位の時間で歩かれても大丈夫です、貴方は少し健康に問題がありますから標準的なコースをゆっくり歩いて下さい、という処方を書きます。

一方、このドックは地域興しも狙っていますから、受診者は旅館に一泊して貰います。

翌日、受診者は、ロード処方箋を、赤沢自然休養林のガイドに渡すと、ガイドがそれを見てコースを案内します。これら一連の流れを森林セラピーと称しています。森林浴研究が盛んな千葉大学の研究成果を参考にして、私たちは森林セラピーを始めました。森林セラピーに係わっているところは、日本の病院では唯一ここだけです。

森林セラピーについての科学的なデータも未整備のままです。従って、森林セラピーに真剣に取り組みたいドクターは、半年から1年頑張ると、恐らく、第一人者になれると思います。

この度、千葉大学医学部・なのはな同窓会の鈴木信夫先生からインタビューの申し入れがありましたので、森林セラピーの宣伝と医師募集を兼ねて、長野県の医療状況を紹介して頂けることは、有り難いと思っています。

中途半端な医師は困ります。木曽谷に来る専門医のレベルが、木曽の医療のレベルになりますから、平均以上の医師であって欲しい。専門医としてある程度のレベルを維持している医師が、ここへ来られて数年間頑張って貰いたい希望があります。

木曽地域の厳しい医療現状は、1人の医師では持ちこたえられないので、複数の医師が交替制で支えるか、或いは、代替りの病院で支えるシステムを考えていますが、それには、今の倍の人数、35~36人の医師が必要になります。志のある医師にとって、木曽の地域医療を守ろうという、どこに行っても得られない使命感、充実感は充分あります。そういう意味からは、是非、木曽へ来て頂きたいと思います。どうぞ、宜しく、お願いします。



森のお医者さん

森林浴発祥の地記念碑

